

【書評】松尾寿子『国際離婚』

(集英社新書 2005年6月22日発行 230頁 本体680円) ISBN4-08-720298-4

本書は自身が国際離婚の経験があってフリーライターであり、自ら「国際離婚を語りあう会」をネットに立ち上げその「ホームページにアクセスしてきた人たちに話をきいた」(26頁)ことを主体として国際離婚の持つ厳しい側面を伝え、また日本人に結婚とは何かを問いかけた貴重なものである。新書版であって簡潔で読みやすく、また参照文献などは学術書と同じスタイルで明記され、一般の読者とはもとよりこの分野の研究者にとってもありがたい1冊だといえる。離婚に至るには結婚が前提であるが、国際結婚(英語でいうIntermarriage)にはいろいろな結婚形態がある。本書においては、日本人の女性が外国人男性と結婚し離婚に至るケースを念頭に置いて書かれている。

全体はプロローグ、エピローグの他、9章で構成される。著者は第一章(29~48頁)で日本の国際結婚の歴史を簡単に紹介する。「1980年には、7261件だったが、2003年には3万6039件」(30頁)と報告する。その理由として海外旅行者の増加に伴う日本人女性の海外留学の増加で現地の男性と出会う例、それに日本に入国する外国人男性労働者の増加をあげている。さらに「一方で国際離婚者数が増えている事実はあまり知られていない」(34頁)と前置きし「1992年には、7716件だったが、2003年には1万5256件」(35頁)と最近の増加傾向を指摘し、本書の問題提起をする。

第二章(49~59頁)では「国際結婚が特殊なわけ」と題し日本人同士の結婚と違う3点、(1)結婚に伴う書類などの手配に時間を取られ「相手の人柄を見抜けない」(2)相手が外国人であるがために価値観などの「理想と現実の格差」(3)相手が外国人であるがために相手の家族や相手国の社会情勢などを含めた「相手の育ってきた背景が見えない」ことを指摘する。そして「相手の人物像をもう少し掘り下げて観察したり、知的関心の持ち方にも注意を払うべき」(58頁)と警告する。

第三章(61~78頁)は国際結婚が国際離婚に至る大きな要因の一つであるDV(ドメスティック・バイオレンス)について考察する。著者は「国籍や人種はまったく関係ない」「職業や学歴も関係」なく(62頁)DVが起こると前置きし、特に外国に移住した場合日本人妻がDVの原因になると論じる。日本人妻は「経済力が消滅する」「言葉に慣れず」「社会システムがわからなければ、土地勘もない。周囲に家族や友人がいないため、孤立」(63頁)するという妻の弱い立場が、暴力性を内包している夫はDV夫に変貌すると分析する。少々短絡的ではあるが、『Women on the Verge』(2001)のKaren Kelskyを参照して国際結婚は「弱者の輪」であり日本人女性との結婚は外国人男性が「自分の弱さをカモフラージュするため」(76頁)という一般化はおもしろい。大半のDVは夫が起こすのであるが、女性がDVの加害者になる可能性があること、また外国では日本と違い「女性側からのささいな暴力を『カットなつてのことだから・・・』で見逃す社会ではない」(77頁)ことを強く認識するようアドバイスしている。

第四章(79~101頁)は国際離婚に伴う大きな問題のひとつである、夫婦間に子供がいた場合の親権問題を扱う。ここでは事例として、配偶者が一方の配偶者に無断で子供を国外に連れ去ることを扱う。日本が1980年に採択された、“Hague Convention on the Civil Aspects of International Abduction”(国際的な子の略奪の民事面に関する条約)を批准していない事実を指摘

し、日本の裁判所や外務省、日本大使館が何の助けもしてくれないことで残された配偶者は途方にくれると報告する。またアメリカで日本人妻が夫から誘拐罪で訴えられたケースと、さらにイスラーム社会では、離婚後の子供の養育は基本的には父親が受け持つ、ということを紹介している。しかしながら日本の警察や司法がまったく無力でないことを2000年オランダ人男性と日本人女性の判例などを説明し強調している。いずれにしても、著者も言及するように「最大の悲惨さは子供の権利がオヤのエゴによって略奪される点」(81頁)ではないだろうか。

第五章(104~119頁)では開業医である野口力さんという日本人男性(50歳)とフランス人妻との25年前の出会いから離婚調停裁判で離婚が成立しその後の家族の生活を「限られたケース」(105頁)として紹介している。そして、「過去にどんな苦しい出来事があったとしても、私達は失敗と成功の両面を丸ごと受け入れながら、前を向いて生きていくしかない」(129頁)とエールを送る。

第六章(121~146頁)は「“移民”という身分への覚悟」と題して、幾例かの国際結婚を紹介しながら、夫の国で暮らすことのむずかしさを読者に訴える。海外で外国人の夫を持ち生活するというのは「ワクワクする異文化体験」(122頁)や「外国暮らしを楽しむような軽いものではないこと」(122頁)を強調してくれる。そして、結婚する日本人が外国で生きていくだけの覚悟があるのかを問いかけてくれる。最後に、「海外生活を選んだのも自分の責任」(145頁)で「夫婦関係が終末を迎えてしまったなら、その決着をつけるのは無論、『本人』以外の何者でもない」(146頁)と強い言葉を送る。

第七章(147~159頁)では具体的に「国際結婚をする前と、した後の心がけておくべき」(148頁)ことを記述している。それらは、相手の家族のことを知り、相手の国の社会事情を勉強し、多くの友人を作り、健康保険を確保し、相手国の一般的な経済感覚を調べ、金銭の管理を書面で残したり、また自分の財産を自己管理すること、就業する機会を持つこと、語学学習やボランティアを積極的にすることなど、多岐にわたっている。また、最後に「海外生活の最終目標は自分の『収入』を自分の力で得ること」(159頁)と記し、国際結婚・離婚の経験者として非常に強い言葉ではあるが、まったく共感する。

第八章(161~194頁)は、「国際結婚が破綻したとき」と題して、日本人女性と外国人男性の国際離婚を主に考えてアドバイスが書かれている。例えば、当たり前のようなのだが、なかなかわからない法律上の離婚手続きが違うことをよく知ること。「日本での離婚手続きは、世界に類を見ないほど、お手軽」(176頁)と書いてあると外国の法律上のむずかしさを察しできる。また「文化の違いが引き起こす深刻な問題」(188頁)として幼児と日本人の母親と一緒にバスタブにつかっている写真を法廷でみせられ性的虐待だと訴えられたケースもあるとして紹介している。いずれにしても著者は、孤独に陥らないで、離婚を考えている女性たちのグループなどに参加するよう勧めている。

第九章(195~211頁)では、21世紀を迎えて日本人女性の国際結婚に対する意識が変わってきたとし、「法律婚」をしないで「事実婚」をしている人たちが増えていると報告する。このことを著者は多様化する女性の生き方が今後ますます結婚形態を変えていくと感じ、多くの国際結婚・離婚にかかわる人たちの結婚に対するイメージが画一化されていて、保守的であったと指摘する。

本書は簡潔な4文字タイトルで「国際離婚」としているが「国際離婚」だけを扱ったものではない。また国際離婚の法律のアドバイスや、国際離婚のカウンセリングを目的としたものではない。さらに、複雑な質問票を利用して離婚者の経験を数量化したものでない。かといって、事例を一つ一つ紹介して、ただ興味本位に国際離婚をした人たちの悲劇を紹介したものでもない。本書は、多くの事例を通して、また著者自身の経験を通して、国際結婚への個人的な見解が的確に語られ、さらに結婚することの意義、特にこれからますます増えると考えられる国際結婚を考える上でとても貴重なものであるといえる。著者は、決してただ「単なる憧れや見栄で国際結婚をするな!」というメッセージを送っているわけでもない。結婚とは自分というものに他人を受け入れ、お互いを成長させるものだと考える。

残念ながら本書では、国際離婚における子供たちへの影響がほとんど語られなかった。第四章で著者は子供の親権について言及するし、第五章でも野口さん夫妻の子供のことが少し語られたのだが、多くの国際離婚では実際に二つの文化、社会、国家をはさんで子供の生活や将来に何らかの影響（物理的・心理的）を与えているに違いないと私は感じる。今後、この点について報告していただける機会があるといい。

著者の意見が読みやすくて的確に語られた本書を、外国人と親密なお付き合いをされている方はいまでもなく、多文化共生や異文化コミュニケーションなどを学ぶ大学生などにも是非一読していただきたいとお勧めする。

豊田裕之(とよた・ひろゆき)  
htoyota@miyazaki-mic.ac.jp  
宮崎国際大学国際教養学部